

〈研究ノート〉

## 中間言語における機能範疇素性について： 極小理論によって可能となった予測とその問題点

山根麻紀

Since the Minimalist Program (Chomsky 1995) introduced the notion “functional features” as points of deviation among natural languages, researchers of language acquisition have been trying to figure out what forms developing grammars possibly take within the Minimalist framework. This research note provides brief summary of the new linguistic theory in comparison with pre-Minimalist theories, together with some latest studies of adult second language acquisition. The summaries of the studies show that predictions of possible interlanguage grammars have become much more fine-tuned in the new theory, though some problems are yet to be solved.

キーワード：成人第二言語習得，機能範疇，素性，中間言語，パラメータ

チョムスキーの極小理論 (The Minimalist Program, Chomsky 1995) の誕生以来、生成文法を理論的基盤とする言語習得研究にも、「機能範疇素性」(functional feature) という概念が導入されるようになった。

機能範疇は、名詞や動詞などのような語彙範疇とは異なり、より抽象的な文法情報を持つもので、D (determiner: 限定詞)・I (inflection: 屈折)・C (complementizer: 補文標識) などがある。D は名詞句を補部に持って限定詞句を作り、definiteness (定性) や specificity (特定性) などの意味素性が生ずる場となる。I は助動詞や時制、主語と動詞の数・人称の一致などをつかさどる素性である。C に位置する WH 素性値の強弱は、WH 移動が顕在的か潜在的かを決定する。

極小理論では、自然言語の文法的差異をもたらすパラメータは、このように機能範疇に存在する素性の有無・または強弱に帰せられている。この考えを第二言語習得論に応用すると、その研究の方向性は(1)のような形に集約される。

(1) 第二言語 (second language, 以下 L2) 学習者の母語におけるある素性の存在の有無・素性値がターゲット L2 と異なる場合、その素性の新たな習得・または素性値のリセットは可能か否か。

この研究ノートの構成は、以下の通りである。まず I では、極小理論の簡略な概要と、それ以前の理論との比較を提示し、素性という概念の導入によって、言語習得に関してどのような予測が可能になったかを述べる。II では、素性という概念を基に行われた最近の研究の概要をまとめる。III では、以上をふまえて、言語習得研究における素性の可能性と限界について考察する。

## I.

自然言語のバリエーションはパラメータ値の設定の違いに由来するという理論は、チョムスキーによって 1960 年代にすでに提案され、1981 年の「統率束縛理論」(The Government and Binding Theory) を経て極小理論へ継承された。しかし、パラメータが実際には何であるかは、理論の変遷の中で異なった捉え方をされてきた。

極小理論以前の理論は、素性という概念の萌芽は孕んでいたものの、それにパラメータの中心的な役割を付与するまでには至っていない。パラメータは、素性という抽象的なものではなく、しばしば表示構造上の・かつ表面的な性質に帰せられていた。

これはひとつには、理論における文生成の考え方に原因がある。極小理論における文生成では、語彙項目 (lexical item) 素性の統語的要求に起因する結合 (Merge) と、機能範疇素性によって促される移動 (Move) または一致 (Agree) が、区切りなく連続的に行われる。このプロセスを簡略に図式化すると、(2) のようになる。

(2) 極小理論による文生成

- ①結合：meet[V, uD]+ who [D, ucase, Q]  
 ↓  
 ②結合：v[uV, ucase:ACC, uD]+[meet[V]who[ucase:ACC, Q]]  
 ↓  
 ③結合：John[D, ucase]+ v[uD][meet who[ACC, Q]]  
 ↓  
 ④結合：T [tense:PRESENT, ucase:NOM] + John [ucase] v [meet who [ACC, Q]]  
 ↓  
 ⑤移動：John[NOM]i T[tense:PRESENT]ti v[meet who[ACC, Q]]  
 ↓  
 ⑥結合：C[+Q]+ John[NOM]i T[tense:PRESENT]ti v[meet who [ACC, Q]]  
 ↓  
 ⑦移動：who[ACC, Q]j C[+Q]John[NOM]i T[tense:PRESENT]ti v [meet tj]

まず、他動詞“meet”が目的語限定詞句（determiner phrase, 以下 DP）をとる前の形は、D 素性において解釈不可（uninterpretable）であるとされる。これを uD で表す。ここに DP “who” が結合すると、その D 素性が uD を素性照合し、解釈不可能な素性を消し去る。DP “who” にはまだ格が付与されていない。これを u（uninterpretable）case で表す。次に、V を補部にとり・その中の DP に目的格 ACC（accusative）を与え・動作主（AGENT）DP を要求する v が結合する。これらの性質は、v において、u（uninterpretable）V・u（uninterpretable）case:ACC（accusative）・u（uninterpretable）D という素性として現れる。このうち前者 2 つの素性は、動詞“meet”の V 素性と“who”の ucase と素性照合する結果消し去られ、残る uD も次の段階で、D 素性を持つ動作主“John”と結合することで消し去られる。このような語彙項目の結合を引き起こす素性は、解釈不可能な素性の中でも特に、「選択的素性」（selectional feature）と呼ばれる。

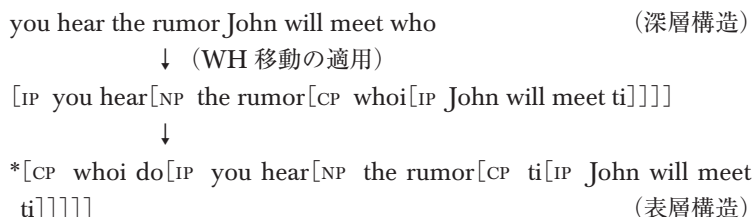
続く機能範疇 T の結合は、その ucase: NOM（nominative）の抹消の

ため“John”の移動を促し，“John”には主格が付与される。機能範疇Cの結合は、WH句の移動をもたらす。これらの移動を促す素性は、解釈不可能な素性中、「非選択的素性」(non-selectional feature)と呼ばれる。英語のCのように、そこにあるWH素性値が強い場合は、(2)–(7)のように顕在的移動が起きる。この素性値が弱い場合は、スペルアウト(spell-out)と呼ばれる文の実際の発生(発音)の後に、WH句が潜在的移動をし、素性照合を行うとされる。これを「一致」(Agree)という。

このように極小理論では、派生のすべてのプロセスにおいて、素性というものがあたかも「磁石」のように、結合(Merge)と移動(Move)を促す。ここでは文の生成は、純粋に派生的であると言える。

それに対し、極小理論以前には、いくつかのレベルにおいてそれぞれの表示形式があり、それぞれのレベルに特有な「規則」が適応され、文が生成されるとしていた。例えばこのプロセスは、(3)のように図式化して表すことができる。

### (3) 極小理論以前の文生成



まず深層構造では、語彙項目がすべて出揃い、おおよそ主題役割割(theta role)の順に従って配置される。次に、表層構造を得るために、必要な移動規則が適用される。(3)で起こっているのはWH移動である。動詞“meet”の目的語の位置に生じた“who”が、まず従属節のComplementizer Phrase (CP) 指定部に移動し、次に主節のCP指定部に動くのだが、この例では2番目の移動が非文の原因となる。これは英語では表層構造レベルに適応される「下接の条件」(Subjacency Condition)と呼ばれていたものである。これは、「移動の際に境界節点(bounding node)を2つ以上超えてはならない」という制約で、例えば英語ではIPとNP・イタリア語ではCPとNPが、この境界節点にあた

るとされていた。そして、どの最大投射 (= 句) が境界節点となるかが、パラメータ値の違いとされていたのである。

このように極小理論以前には、文の生成にあたっていくつかの表示形式が想定されていたため、パラメータというものが表層的に・時にはある意味ジオメトリックにとらえられることがあった。その結果ややもすると、L2 習得という過程が、「母語には存在しない表示上の何らかの制約を習得しなおせるか否か」(例えば英語母語話者がイタリア語を習得する際に、境界節点を母語値の IP からターゲット値の CP に学び直せるか否か) という問題に収束してしまうというようなことがあった。

極小理論の素性という概念によって、言語習得研究はこのような「表層的制約」から解放されたと言える。これが意味するところは大きい。というのは、もし習得過程にある中間言語が普遍文法 (Universal Grammar, 以下 UG) の許す範疇にあるなら、ある L2 に向かってパラメータ・リセッティング途中の文法は、母語でもターゲットの L2 でもないが、その中間的パラメータ値を持つ「第三の自然言語」の様態を呈する可能性があるからである。これは実際に、先行研究で少なからず報告されている (DuPlessis, Solin, Travis and White 1987; Hulk 1991; MacLaughlin 1996 他)。このような可能性は、例えば上で挙げた「境界節点パラメータ」のような、表層のかつ制約的性質を持つものでは、観察することができない。パラメータが、機能範疇素性のように抽象的で・その値の設定の組み合わせが何通りかの文法を可能にするものだと想定して初めて、中間言語のバリエーションが説明可能となるのである。

この素性の持つ理論的可能性について、例えば Travis (2008) は、いくつかの考えを提示している。機能範疇素性は通常、(2) で見た T (ense) のように、解釈不可能な素性 (T の場合は *ucase: NOM*: 解釈不可能な主格) を照合して消し去るために、DP の移動を生じさせる。ところが、(4) のアイスランド語の奇態格のように、素性照応と語彙項目の移動をそれぞれ別個の素性が引き起こす場合があることを、Travis (2008) は紹介している。

## (4) アイスランド語の奇態格 (quirky case)

Mér líkuðu hestarnir  
 me DAT liked 3PL the horses NOM.PL  
 (I liked the horses)

奇態格とは、主語の位置にある要素が主格でない格を得ているものである。もしも T が主格を照応するために指定部（いわゆる主語の位置）に DP を移動させるなら、(4) のようにそこに与格 (dative) DP が生じるはずがない。Travis (2008) はこれを、T の指定部にあって語彙項目の存在を要求する EPP 素性と、主格を付与する格素性という 2 つの素性が、別個の働きをするからだと言っている。すなわち、T の EPP 素性を照応するためにのみ与格 DP が主語の位置に移動し、T の主格素性は V 補部にとどまる主格 DP と照応するということである。

また Travis (2008) は、(5) のようなドイツ語の例を挙げ、語彙項目の素性のみが移動を起こす場合も紹介している。

## (5) ドイツ語の部分 WH 移動 (partial WH-movement)

- a. Mit wem glaubt Hans daß Jakob jetzt spricht  
 with whom thinks Hans that Jakob now talks
- b. Was glaubt Hans mit wem Jakob jetzt spricht  
 what thinks Hans with whom Jakob now talks  
 (With whom does Hans think Jakob is talking now?)

ドイツ語では、(5) -a. のような英語と同様な長距離 WH 移動も可能だが、(5) -b. のように、本来の WH 句が従属節の CP 指定部にとどまり、主節の CP 指定部にはスコープマーカの “what” が生じている形も文法的である。これを部分 WH 移動 (partial WH-movement) という。Travis (2008) は Cheng (2000) をふまえて、これを WH 句の素性移動の例として挙げている。すなわち、従属節 CP まで移動した “mit wem” (with whom) が、音形はそこにとどまったまま、その素性 (抽象的な WH 素性) だけが主節 CP に移動し、その WH 素性が最もニュートラルな WH 句である “was” (what) という形をとってスペルアウトされる、

という分析である。

これらをふまえて L2 習得における中間言語の文法について仮説をたてるとすると、例えば以下のようなことが言える。(4) で見たように、ターゲット言語の機能範疇に 2 つの解釈不可能な素性が存在すると仮定した場合、双方の働きが正しく習得されたなら、その言語において文法的な発話／判断が可能となる。しかし理論的には、一方が習得され他方が未習得(母語値のまま・または素性値がターゲットと反対の値に設定される)などという状況が想定可能なのである。2 つの素性の双方とも未習得(母語値のまま)という可能性を入れると、予測可能な文法はそれだけで 4 通りで、これは極小理論以前の「ある表層上の制約を習得するか否か」という形の予測より、はるかに強力なものである。

このような予測は、理論上の楼阁ではない。実際に(5) で見たような素性移動は、先行研究において数多く報告されており(Wakabayashi and Okawara 2003, Yamane 2003 (L1 日本語/L2 英語), Slavkov 2008 (L1 フランス語/L2 英語), 他), 言語習得は確かに、素性というものに基づいて分析可能だということを示しているのである。

## II.

ここでは、機能範疇素性がどのように L2 習得の発達についての予測に寄与しているかを示すため、実際の先行研究を紹介する。最初に扱うのは、機能範疇 D に存在する意味素性である。意味素性は上に述べた形式素性とは異なり、「解釈可能な」(interpretable) 素性であり、統語的操作に関与しないという点が「解釈不可能な」(uninterpretable) 素性と異なるところである。二番目に扱うのは、機能範疇 I 周辺の L2 習得研究である。I にあるのは「解釈不可能な」素性で、VP 内に生じた動詞を I まで繰り上げ・主語の数と人称に一致した屈折形態素の生起に関与するものである。

### 1. D (determiner) の習得

Ionin, Ko and Wexler (2003, 2004) は、D (determiner: 限定詞) に存在する 2 つの意味素性 [ $\pm$ definite]・[ $\pm$ specific] に焦点を当てて、その習得について報告している。意味素性は、上で見た「解釈不可能な」素性(uninterpretable feature) と異なり、結合や移動に関係しない「解釈可能な」素性(interpretable feature) とされているが、極小理論による

素性という概念の導入により、言語習得理論においても多く研究されるようになったものである。

彼らが実験対象としたのは、機能範疇 D がないとされているロシア語・および韓国語の母語話者で、D を持つ英語を学習している成人であった。つまりここで問題とされているのは、母語に存在しない機能範疇に關係する素性が習得可能かどうか、ということである。

[± definite] とは、話し手と聞き手の双方が、言及されているその名詞句を既知のものとして共有しているか否かという情報に關係する素性である。[± specific] は、話者が言及されている名詞句の特異性を述べる時にプラスの値を付される素性である。これらは、英語では (6) のような文で現れてくる。

- (6) a. I saw a cat. I gave the cat some milk.  
           [-definite]      [+definite]  
 b. John has this weird purple telephone.  
           [+specific]  
 c. John has a /#this telephone, so you can reach me there.

(6) -a. 中の不定冠詞 “a” は、名詞句 “cat” が聞き手にとって新出であることから付与されるものであり、続く 2 文目では当該名詞句が話し手と聞き手の両者にとって既知のものとなったことから、[+definite] の性質を持つ “the” が用いられている。

Ionin 他 (2004) は、限定詞句で生じる英語の冠詞類は、[± definite] 素性に基づいてのみ値の設定がされ、[± specific] 素性に関してはニュートラル (設定がない) と論じている。従って [+specific] を具現するためには、(6) -b. のように、冠詞システムではなく指示表現の “this” が用いられる。(6) -c. は、[+specific] でないコンテキストで “this” を用いた場合の不自然さを表している。

さらに、Ionin 他 (2004) は、D に存在する素性について、英語のように [± specific] がニュートラルで [± definite] 素性が冠詞の形態として具現化する言語と、逆にサモア語のように、[± definite] がニュートラルで [± specific] 素性が冠詞に形態的に具現化する言語があると論じている。図式化すれば、(7) の通りである。



(7)

a. [±definite] による冠詞の区別 (英語)

	+definite	-definite
+specific	the	a
-specific		

b. [±specific] による冠詞の区別 (サモア語)

	+definite	-definite
+specific	le/l	
-specific	se/s	

自然言語が上のような選択肢を持つという仮定のもとに, Ionin 他 (2004) は以下の (8) の様な習得予測をたてた。

(8) L2 としての英語の冠詞選択に関する仮説 (Fluctuation Hypothesis)

- a. L2 学習者にとっては, 普遍的意味素性の [±definite] と [±specific] の両方が, 常に得られる情報として存在する。
- b. L2 英語学習者は, 英語の十分なインプットを受けて, 英語の冠詞が [±definite] に特化されていることを習得するまでは, [±definite] と [±specific] の選択の間で揺れ動く可能性がある。

特に上の (8) -b. について, Ionin 他 (2004) はさらに詳細な予測をたてている。実際のインプットにおいては, “the” は [+definite] と [+specific] の両方を満たすコンテキスト (ある名詞句が話し手と聞き手にとって既知であり・かつ話し手がその特異性を強調せんとする意図を持つ場合) において使われることが多い。その結果学習者は, [±definite] と [±specific] の2つのパラメータを分別できず, [±definite] の値に関わらず, [+specific] のコンテキストで “the” を過剰生産してしまうと予測される。そして, [-specific] のコンテキストにおいては, もうひと

つの冠詞“a”を用いて差異化を計ると予測される。これはまとめると、以下の(9)のようになる。

(9) 中間言語の英語における冠詞の区別

	+definite (target: <i>the</i> )	-definite (target: <i>a</i> )
+specific	the を正しく使用する	the を過剰生産する
-specific	a を過剰生産する	a を正しく使用する

この予測に基づいて、書き言葉による産出テストが行われた。韓国語母語話者とロシア語母語話者の2グループの英語学習者に、印刷された英文の会話文を提示し、一部空欄になっている箇所に適当な冠詞(“a”または“the”)を入れるよう指示をするというものであった。実験の結果はほぼ上の予測通りであったと、Ionin 他(2004)は報告している。すなわち、被験者の誤用はランダムには起こらず、[+specific]のコンテキストにおける“the”の過剰生産と、[-specific]における“a”の過剰生産に偏っていた。Ionin 他(2004)はこの結果を、本来英語の冠詞選択では作用していない[± specific]素性が、普遍的意味素性として学習者の文法に影響を与えているからだとして分析している。

## 2.1 (inflection) の習得

Prévost (2008) は、L2 習得における屈折形態素(動詞の人称・時制による語尾活用)と抽象的な素性の関係について研究を行った。中間言語の産出(発話・作文など)では、屈折形態素の誤用・脱落はよく観察されることだが、この現象に対して、極小理論に基づいて2つの仮説が提示されている。ひとつは Impairment Representation Hypothesis (Meisel 1997, 以下 IRH) と呼ばれるもので、中間言語における屈折形態素の欠如は機能範疇(この場合は I)の欠損によるものである、という説である。この説によると、機能範疇そのものが欠損しているから、そこには素性が生じ得ず、従って屈折形態素も欠落するということになる。もうひとつは Missing Surface Inflection Hypothesis (Prévost and White 2000, 以下 MSIH) で、中間言語において欠損しているのは機能範疇そのものではなく、ただそこに実際の(音形を持った)形態素が生じ損なった、という説

である。この説では、機能範疇が存在するのでそれに関連する素性も習得可能で、形態素が現れないのは、文法ではなく何らかの言語運用上の理由によるものだとされている。

Prévost (2008) は、英語を母語としてフランス語を習得中の成人の自然発話データを得、いくつかのコンテキストにおける動詞の屈折の有無を分析した。ここでは、[+finite] (定形：屈折有) コンテキストと [-finite] (不定形：屈折なし・前置詞の後などの) コンテキストを取り上げる。フランス語ではこの両者は、(10) のように生じる。

(10) フランス語の定型コンテキストと不定形コンテキスト

a. 定型

Elle sort avec lui.  
she leave 3S with him  
(She leaves with him)

b. 不定形

J'ai quelque chose à faire. (前置詞の後)  
I have something to do [-finite]  
(I have something to do)  
Je ne peux pas parler. (動詞の補語)  
I (ne) be able to not speak [-finite]  
(I am not able to speak)

機能範疇に欠損がないとする MSIH では、[+finite] の位置で屈折を欠いた動詞は (パフォーマンスエラー等の原因により) 起こりうるが、[-finite] の位置で屈折形態素の付いた動詞は起こりえない。一方、機能範疇が欠損しているとする IRH では、屈折形態素の有無はランダムに起こることが予測される。

Prévost (2008) のデータは、MSIH を支持した。すなわち、[+finite] の位置で屈折を欠いた動詞の生起数は、[-finite] の位置で屈折形態素の付いた動詞の生起数より、統計的に顕著に多かったのである。これに基づき Prévost (2008) は、第二言語習得過程にある中間言語の文法には、機能範疇とそれに付随する素性が存在すると結論づけた。

## III.

上の II-1. で見たような意味的素性の習得は、筆者の知る限り、極小理論以前にはほとんど着手されなかったものである。極小理論以前の理論では、一部の研究分野を除き、意味論的分野は統語論的分野と一線を画していたためである。素性という概念の導入によって、意味というものが統語的要素と並んで素性としてとらえられるようになり、L2 習得の予測に参入するようになったのである。

一方でこのような研究は、いまだ問題を孕んでいる。どのような素性が「解釈可能」か・また「解釈不可能」かは、いまだに議論の分かれるところだからである。例えば T にある時制素性を「解釈可能」ととらえる研究もあれば (Hawkins, Casillas, Hattori, Hawthorne, Husted, Lozano, Okamoto, Thomas and Yamada 2008), 「解釈不可能」ととらえるものもある (Leung 2008)。そのような状況で、「普遍的意味 (= 解釈可能な) 素性はすべて成人言語学習者にとって習得可能なオプションである」と結論づけるのは、まだ確固とした根拠を欠くことかもしれない。さらに根本的なことを言えば、普遍「文法」が成人第二言語習得において作用しているか否かは議論が尽くされてきたが、普遍「意味論」は今までほとんど問題にされていない。純粋に意味領域の問題が、統語操作の問題と同等に言語習得の臨界期や母語転移の問題に関わることなのかは不明だし、直感的にはそうだとはいえないところがある。

上の II-2. で論じた I-feature も、極小理論以前は異なった視点から研究されていた。いわゆる「語順」研究である。I にある V 素性は英語では弱く (従って一般動詞の繰り上げは生じず)、フランス語では強い (従って動詞は I に繰り上がる)。I と動詞の間には副詞があり、したがって動詞が副詞より上部に現れればそれは I に繰り上がっており、下に現れれば繰り上がり方が起きていないということになる。White (1992) は、母語がフランス語で英語を習得中の成人が、母語では強い V 素性をターゲット値 (弱) にリセットできるかどうかを、学習者の発話と文法性判断における動詞と副詞の語順の違いに着目して調査した。これは、中間言語における機能範疇 I の研究としては、当時画期的なものであったが、極小理論による素性の導入によって、中間言語の I 周辺の様子がさらに詳細に予測可能となったのは、上で紹介した通りである。

このように、極小理論のもたらした素性という概念によって、UG の範

圏内で予測可能な中間言語のバリエーションは増大した。しかし、理論研究においては、どのような素性があり・それらがどのように組織されてられ・どのように作用するかは、いまだにおおいに議論の余地のある問題なのである。これらが粗なままで言語習得をとらえると、UG内で可能な中間言語は、ともすれば「何でもあり」ということになりかねない。現時点では強力過ぎる（つまり、現象に対して過剰に一般化を行ってしまう）理論の、さらなる発展が待たれるところである。

### 参考文献

- Cheng, L. (2000) Moving just the feature. In Müller, G., Utz, U. and von Stechow (Eds.), *Wh-scope Marking*. John Benjamin.
- Chomsky, N. (1964) *Current Issues in Linguistic Theory*. Mouton.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Foris.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*. MIT Press.
- duPlessis, J., D. Solin, L. Travis, and L. White (1987) UG or not UG, that is the question: a reply to Clahsen and Muysken. *Second Language Research* 3: 56–75.
- Hawkins, R., Casillas, G., Hattori, H., Hawthorne, J., Husted, R., Lozano, C., Okamoto, A., Thomas, E. and Yamada, K. (2008) The semantic effects of verb raising and its consequences in second language grammars. In Liceras, J., Zobl, H. and Goodluck, H. (Eds.), *The Role of Formal Features in Second Language Acquisition*. Lawrence Erlbaum.
- Hulk, A. (1991) Parameter setting and the acquisition of word order in L2 French. *Second Language Research* 7: 1–34.
- Ionin, T., Ko, H. and Wexler, K. (2003) Specificity as a grammatical notion: evidence from L2 English article use. In Garding, G. and Tsujimura, M. (Eds.), *Proceedings of WCCFL* 22: 245–258.
- Ionin, T., Ko, H. and Wexler, K. (2004) Article semantics in L2 acquisition: the role of specificity. *Language Acquisition* 12: 3–69.
- Leung, Y. (2008) The verbal functional domain in L2A and L3A: tense and agreement in Cantonese-English-French interlanguage. In Liceras, J., Zobl, H. and Goodluck, H. (Eds.), *The Role of Formal Features in Second Language Acquisition*. Lawrence Erlbaum.
- MacLaughlin, D. (1996) Second language acquisition of English reflexives: Is there hope beyond transfer. In *Proceedings of the 20<sup>th</sup> Annual Boston University Conference on Language Development*: 453–464.
- Meisel, J. (1997) The acquisition of the syntax of negation in French and German: contrasting first and second language development. *Second*

- Language Research* 13: 227–263.
- Prévost, P. and White, L. (2000) Accounting for morphological variation in L2 acquisition: truncation or missing inflection. In Friedmann, M. and Rizzi, L. (Eds.), *The Acquisition of Syntax*. Longman.
- Prévost, P. (2008) Knowledge of morphology and syntax in early adult L2 French: evidence for the Missing Surface Inflection Hypothesis. In Licerias, J., Zobl, H. and Goodluck, H. (Eds.), *The Role of Formal Features in Second Language Acquisition*. Lawrence Erlbaum.
- Sigurðsson, H. (1989) Verbal syntax and case in Icelandic in a comparative GB approach. Ph.D. dissertation. Lund University.
- Slavkov, N. (2008) Medial Wh-words and inversion phenomena in complex questions: the case of Canadian French speakers acquiring L2 English. In *Proceedings of the 9<sup>th</sup> Generative Approach to Second Language Acquisition Conference*. 218–232.
- Travis, L. (2008) The role of features in syntactic theory and language variation. In Licerias, J., Zobl, H. and Goodluck, H. (Eds.), *The Role of Formal Features in Second Language Acquisition*. Lawrence Erlbaum.
- Wakabayashi, S. and Okawara, I. (2003) Japanese learner's errors on long distance wh-questions. In Wakabayashi, S. (Ed.), *Generative Approaches to the Acquisition of English by Native Speakers of Japanese*. Mouton de Gruyter.
- White, L. (1992) Long and short verb movement in second language acquisition. *Canadian Journal of Linguistics* 37: 273–286.
- Yamane, M. (2003) On interaction of first-language transfer and universal grammar in adult second language acquisition: WH-movement in L1-Japanese/L2-English interlanguage. Ph.D. dissertation. University of Connecticut.